風會報

発　行：東京都立大学
附属高等学校同窓会
〒152-0023 東京都目黒区八雲 1-1-2
発行人：内野滋雄
編　集：同窓会報編集委員会

母校の閉校と今後の同窓会

同窓会理事長　内野滋雄（1期）

昭和四年、七年制高等学校として誕生した母校も、いよいよ平成二十三年三月をもって閉校となります。

初代の川田正澂校長が掲げた「リベラルな思想」「自由主義的な校風」、そして生徒一人ひとりをジェントルマンとして信頼し、自主性と自治の精神を培おうとした伝統は、「自由と自治」「真理の探求」として引き継がれてきました。

戦後、府立高等学校の高等科は東京都立大学に、尋常科は同附属高等学校と形を変えましたが、府立の校章・校旗・校歌は附属が引き継ぎ、その伝統と共に今に至っています。

来年三月には附属は閉校し、新たに東京都立桜修館中等教育学校の生徒が、一年生から六年生まで校舎を埋めることになり、校章・校旗・校歌は桜修館が引き継ぎ、「真理の探求」「高い知性、強い意志、広い視野」を校是とする学校となります。

今年の記念祭を見ても、時代が変わり企画も変わったとはいえ、自由な発想からの表現は、府立・都立時代の伝統が脈々として受け継がれ、レベルの高いものとなっていると感ずる者は私ばかりではないでしょう。

閉校に当っての諸行事

想いは個々に違いはあるでしょうが、青春時代を過ごし、人格形成に大きな影響を受けたことは間違いありません。私などは、恩師・先輩・友人など全てが素晴らしく、ここで育ったことに幸運と感謝の想いを持っています。

さて、閉校式は平成二十三年三月五日(土)午前十一時四十五分からパーシモンホール大ホール、記念碑贈呈式は午後一時十五分から学校の中庭で、閉校記念パーティは午後一時四十五分からパーシモンホール小ホールでと決まりました。

記念碑については、平成二十年十二月発行の会報でご説明し、〝記念碑の建立と閉校後の同窓会運営資金〟を目的とした募金をお願いいたしました。しかし初年度では目標額に到達せず、翌二十一年に再度お願いしましたところ、府立高等学校同窓会から百萬円のご寄附をいただき、目標の五百萬円に達しました。

皆々様のご厚情に深く感謝いたし、厚く御礼申し上げます。

今後の同窓会

来年三月で、都立大学附属高校卒業生からの同窓会費の納入は終り、同窓会の収入は、わずかな利息以外は零となります。現在までの同窓会は、毎年の卒業生からの八十万円程度の会費収入と貯えの一部で活動を行ってきました。

閉校後は単独で活動を行うのか、桜修館と一つの同窓会として活動をするのかなどを検討してきましたが、少なくとも桜修館の一期生が卒業して、その意向がどうなるかが問題として残っております。

一年程前から、附属と桜修館の二校の校長をお務めの須藤 勝先生から、「八十余年の歴史と伝統をもつ府立と附属の二つの同窓会と桜修館の同窓会を含め、三つの同窓会が緩やかな連携を持つようなことはできないだろうか」という相談があり、府立の同窓会理事会で須藤校長のご意見を伺ったことがあります。

須藤校長の願いは、「優秀な先輩が築き上げた、よい伝統を大切にし桜修館の発展を願う」というもので、「三つの同窓会を一つにすることは難しいだろうが、緩やかな連合体を持ちたい。部活動のOB会では府立・都大附・桜修館の枠を越え、後輩の指導に当っている。学フォーラムに同窓会の教育力を活用し、継続的にキャリヤ教育を推進したい。府立・都大附の同窓会を今後も継続して発展させ、桜修館の同窓会設立の支援を願いたい」というものでした。

三同窓会連携の具体的構想

須藤校長の提案もあり、本年八月十四日に府立・都大附の同窓会と桜修館PTA、学校のトップの方がたとの会談があり、緩やかな連合体としての組織を設立することには四者とも異存はなく、組織の設立を確認しました。

会の名称は「八雲が丘学友会」との提案があり、それに対し高校の場合は校友会がふさわしいのではないかとの意見があり、これらを含め理事・評議員会議で諮りたいと考えております。

会の事務局は都大附（平成二十三年四月以降は桜修館）、会長は都大附同窓会から、会則の原案は桜修館PTAが作成する。以上が確認されました。

これらにより今までに寄せられた多くの同窓生の意見のように、「何らかの形で同窓会を存続する」、「桜修館との連携を保つ」などの方向が確定したとも考えており、年内の理事・評議員会議、および来年に予定されている同窓会総会で承認され、母校の歴史と伝統の継承者が自然の流れの中で決まってゆくことを願っています。

そうであれば、戦後われわれ都立が自然の形で校章・校旗・校歌を受け継いできた経緯と極めて近い形であると思います。

笹のぶえ副校長は、府立・都大附のOBの著書を学校に寄贈してもらい図書館に納め、先輩の業績と足跡を生徒に知って欲しいと言っておられますが、この発想は緩やかな連合体のあり方を如実に表しているともいえるのでしょう。

以上、閉校に関するその後の経過をお知らせいたしましたが、閉校式の日には、一人でも多くの方においでいただき、記念碑も見ていただきたいと願っています。

総会のお知らせ

母校が来年の3月をもって閉校されるに当り、その後の同窓会の運営などを協議する総会を、左記のとおり開催しますので、多数ご参加いただきますようご案内申し上げます。

理事長　内野 滋雄

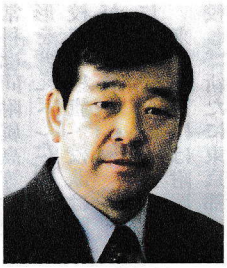
日時：平成23年4月23日(土)
午後1時受付開始
午後2時開会
会場：母校多目的ホール
出席申し込み方法：
＊同封の葉書でお申し込みください。
申し込み締切日：平成23年3月31日
＊出席申込者には議題書等詳細をお送りします。

母校閉校関連行事と申し込みの方法

1. 閉校記念式典：平成23年３月５日(土)
午前11時45分～午後1時　会場：パーシモンホール大ホール
先着申し込み250名招待
＊同封の葉書でお申し込みください。
2. 閉校記念碑贈呈式：同日午後1時15分より
会場：母校中庭　＊自由参加
3. 閉校記念パーティー：同日午後1時45分より
会場：パーシモンホール小ホール
先着申し込み80名受付
会費：５，０００円 ＊会費は受付で申し受けます。
＊同封の葉書でお申し込みください。
4. 閉校記念誌の発行：平成23年３月５日
＊詳細は2ページをご覧ください。
5. 「校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌集」ＤＶＤの頒布
＊詳細は16ページをご覧ください。

都立大学附属高等学校の伝統は不滅

東京都立大学附属高等学校
東京都立桜修館中等教育学校
学校長　須藤　勝



来年の三月五日は都立大学附属高等学校最後の卒業生の門出の日です。当日は都立大学ゆかりの地であるパーシモン・ホールにて彼等、彼女らの卒業式に続き、都立大学附属高等学校の閉校記念式典も予定されております。この地は校歌にも歌われている「八雲が丘」の高台にあり、都立大学の前身でもある府立高等学校ゆかりの地でもあります。

皆さんの一番若い後輩である六十一期生は、有終の美を飾り、殿を務める気概を持ってクラスマッチに、記念祭に、合唱コンクールにと全力を尽くしてきました。部活でも弓道、野球、サッカー、水泳、そして吹奏楽や軽音楽などすべての部において輝かしい実績を残しました。昨年の先輩が大学進学実績を躍進させたのを受け、今は猛勉強中です。素晴らしい進学実績を残して巣立ってくれると期待しているところです。

その伝統を引き継ぐ桜修館中等教育学校でも、五年前には小学生のような幼さの残った生徒達が、今やたくましく成長し、来年には6年生になって大学受験に挑戦します。進路希望調査では、東大を目指す者が十名近くいる他に、一橋や東工大など国公立大学を目指す者が数十名、早稲田、慶応、明治など名門私立大学を目指すものが百名近くおります。旧制府立高等学校と同様に、生徒数は一学年が百六十名と少ないのですが、個性豊かでやんちゃなところは、旧制府立高等学校や都立大附属高等学校の遺伝子をしっかりと受け継いでいるようです。文字通り「個体発生は系統発生を繰り返す」です。

今後、都立大附属高等学校の名は同窓会として残ります。末永く同窓会の発展を祈ります。そして、皆さんが生み出した桜修館中等教育学校も温かく見守って下さい。

繋がる伝統

東京都立大学附属高等学校
副校長　笹　のぶえ

一、学校の現状

本校は、本年度をもって閉校するが、先輩方が築いた「自由と自治」の伝統を継承し、ますます繁栄を続けている。

五月下旬のクラスマッチ。都大附生が、幹部として取り仕切る最後の学校行事。前日の大雨で、会場となる駒沢公園の競技場は浸水。しかし、早朝から集合した幹部たちの人海戦術による吸水、砂撒き、ライン引きのグラウンド整備で、競技場のコンディションも整い、無事開催。団別応援合戦、全員リレー、団別対抗戦等、初夏の一日、熱戦を繰り広げた。

九月上旬の記念祭。府立高校時代からの伝統の演劇。最後の三年生四クラスが挑戦したのは、『死神の精度』『時をかける少女』『ザ・マジックアワー』『ぼくたちと駐在さんの七〇〇日戦争』の演目。クラスの個性を発揮し、涙あり、笑いありの舞台は、リハーサル、一日目、二日目と、進化し続け、見事に観客の心を揺さぶった。

出入りのカメラマンが、「毎年、期待通りの演劇を披露してくれる。他の都立高校に比しても精度の高い舞台である。」と評していた。

行事で力を発揮した158名の都大附三年生は、今度は、「真理の探求」と一人一人の進路実現に向け、受験勉強に邁進している。

二、教員の異動状況

転出（氏名、担当、転出先）
粕谷 薫子（国語）深沢高校
佐藤 義弘（世界史）松原高校
菊地 幹雄（地理）北園高校
竹花 康男（物理）大泉高校
松田 政幸（生物）清瀬高校
江島 利治（保健体育）立川国際中等教育学校 兼 北多摩高校
北田 和吉（英語）白鴎高校 兼 白鴎高校附属中学校
松本 麻子（英語）国際高校

母校の閉校記念誌「自由と自治」3月5日発売!!

母校の閉校を記念して母校が編纂を進めていた記念誌「自由と自治」が、来年3月5日、閉校記念式典の当日発行されることになりました。

内容（目次抜粋）

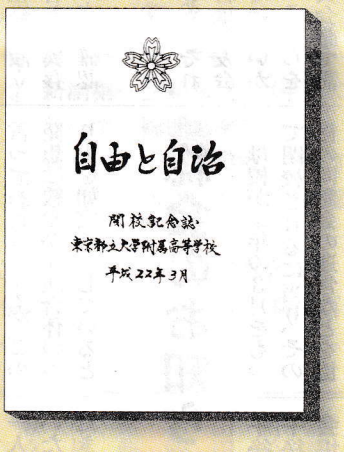
挨拶：須藤　勝校長、内野滋雄当会理事長、楠川絢一府立高校同窓会理事長、第19～23代校長、野上公平閉校記念碑作家

本校の歩み沿革

同窓生：三善　晃（1期）、堀内茂男（2期）、雨宮　健（3期）、柳沢信夫（4期）、宮下　襄（5期）、田中敏雄（6期）、川上隆朗（7期）、須田大春（8期）、朱牟田静雄（9期）、佐伯貞浩（10期）、藤原卓利（11期）、渡辺知之（12期）、13期同期会代表、菅野　敬（14期）、長沼行太郎（15期）、鹿島則雄（16期）、中原　宣（17期）、渡辺俊雄（18期）、吉安慎二（19期）、司馬春英（20期）、塚田紀子（23期）、田中桂子（26期）、大野文博（27期）、安部文晴（28期）、瀬川智貴（29期）、星野祐史（30期）、諸橋敬子（30期）、藤原桂子（32期）、川面　忠（34期）、海老澤美春（51期）、野口立行（56期）、木村茉莉（57期）、小山雅人（58期）、田中駿一（59期）、西田幸哉（61期）

教職員等：学習指導、進路指導、生徒指導、クラブ活動

資料：紀要編纂、学校通信「とだいふ」、校歌・寮歌、教職員在職年表、最終年度生徒・教職員



※表紙のデザインは変更することがあります。

A4版・約150頁・見返付並製

頒布価格（送料とも）1,500円

注文の方法：
同封の振替用紙で注文してください。
発行後メール便でお送りいたします。

仮称「八雲が丘文庫」開設に際し、図書ご寄贈のお願い

東京都立大学附属高等学校 副校長　笹 のぶえ

東京都立大学附属高等学校の閉校にあたり、東京都立大学附属高等学校、東京都立大学附属高等学校同窓会、東京都立大学附属高等学校および東京都立桜修館中等教育学校　保護者と教職員の会は、「真理の探求」を実現し続けた、本校の教育活動の足跡を後世に残したく、仮称「八雲が丘文庫」の開設を計画しております。

本校はこれまで、14,000名余りの卒業生を輩出して参りました。その中には、学術研究者・芸術家の方々も数多いらっしゃいます。同時に、本校で教鞭を執られた歴代の教職員の中にも、生涯を学術研究に傾けた方々も多いと聞き及んでおります。

このような都大附にゆかりのある皆様方のご研究、ご研鑽の成果を、本校の教育活動の成果の証として一か所に残すとともに、本校の伝統を受け継ぎ新たに発展・成長していく、桜修館中等教育学校の生徒たちに示すことで、彼らの学ぶ意欲を引き出し、先輩方を将来の学びのモデルにし、彼らの今後の「真理の探求」の指針にさせたいと考えます。

そこで、仮称「八雲が丘文庫」を、本校図書館内に開設し、桜修館中等教育学校に引き継いで参りたいと存じます。

ついては、数多の卒業生、教職員の皆様から、ご著書・ご文献のご寄贈を賜り、文庫の充実を図りたいと考えます。ご賛同いただける方は、誠に恐縮ですが、下記までご著書・ご文献のご提供をお願い申し上げます。

寄贈先：東京都立大学附属高等学校内　仮称「八雲が丘文庫」担当

〒152-0023 東京都目黒区八雲1-1-2
Tel.03-3723-9966
Fax.03-3724-7041

＊誠に恐縮ですが、送料のご負担をお願いいたします。

また、同窓生、教職員の著書に関する図書目録のご送付も受け付けます。その場合は、①書名、②著者名、③発行所名をご記入の上、上記にご送付ください。ＰＴＡ閉校委員会閉校記念事業の予算で、図書目録より選定した図書を購入し、仮称「八雲が丘文庫」の蔵書と致します。

問い合わせ先：同窓会事務局
〒158-0084　東京都世田谷区東玉川
2-3-15　野口 貞義 方
Tel & Fax.03-3720-6007
s-noguchi@ja2.so-net.ne.jp

同窓会名簿補遺

この名簿補遺は、平成21年10月1日～平成22年9月30日の間、本人、または学年理事・クラス評議員から寄せられた情報を元に、文書により本人の確認を得た上で、平成17年発行の同窓会名簿の補遺として掲載するものです。

訃報

◆4期B組　松原省我
（平成21年7月6日）
松尾（近藤）直美
（平成20年8月1日）
高田宗昌
C組　岩井卓也
（平成20年3月17日）
◆26期C組　美濃輪恵子
（平成21年9月）

なつかしの恩師

昭和25年（1950年）11月15日木造瓦葺新校舎完成。
全教職員の記念写真（写真提供：山際正之）

梁田　貞先生の想い出

山際 正之（2期）

私は昭和二十一年（1946年）春、旧制度の都立高等学校尋常科に入学しました。当時高等学校は全国に三十九校ありましたが、本校の様に通常五年の中等教育を四年で終えて高等学校に直結する、所謂七年制高等学校は全国に六校のみで、ユニークな教育を目指すものでした。それだけに選りすぐられた優秀な先生方を揃えたのは勿論、幸いにも戦災を免れた鉄筋三階建の校舎は、大きな講堂や天文台まで備えた立派なもので、俗に「東洋のイートン校」と呼ばれておりました。

その後教育制度の変革があり、三年後には都立大学附属高校に変わりましたが、この間に得た多大な知識と教養の糧、人生の教訓指針など諸々のものは、六十年を経た今でも心の支えであり、忘れ得ぬものであります。

そんな中で、尋常科二年の時音楽を担当された梁田　貞（やなだ・ただし）先生を忘れることは出来ません。言うまでもなく梁田先生は、歌曲「城ヶ島の雨」の作曲者として夙（つと）に有名な方で、当時日本を代表する作曲家のお一人でした。

先生は本校とともに、都立一中（現日比谷高校）でも教鞭をとられ、大柄で端正、その威厳ある風貌は両校で「カバ」とも「ライオン」とも呼ばれる異名で親しまれておられました。

先生は歌唱の発音には特に厳格な方で、音楽の授業の中で「春高楼の花の宴…」や、「Twincle Twincle Little Star…」をよく聴かせて下さいましたが、朗々と教室に響く先生の素晴らしいバリトンは、正にライオンの名に相応しく、類のない名唱でした。

でもその反面、北海道出身の先生は方言のせいなのか、普段のお話しでは、例えば「音楽学校」がどうしても「ク」が抜けてしまって「オンガガッコウ」になってしまうなど、大変ユニークでもあり、いろいろ忘れ難い一面も持っておられました。

梁田先生は、昭和三十四年（1959年）に七十三歳で逝去され、今は東京小平市の小平霊園に夫人とともに眠っておられます。大きなお墓は墓石とともにその一角に「城ヶ島の雨」の楽譜が石に刻まれ、先生の功績を永遠に伝えております。

人生の師、小松先生と片山先生

杉浦 清子（10期）

小松利夫先生は二年と三年のときの担任だった。体育の先生で、がっちりした身体付きは、半世紀近く経って、クラス会に参加して頂いたときも変わられていなかった。我々も六十代に入ると、男性諸君と先生との外見の差はさほど無くなる。

上北沢駅の近くの、まだ武蔵野のおもかげの残る静かな広い敷地の中にある先生のお宅へ、クラスの友人たちと数回伺った。根本的に優しいお人柄の先生だ。それを表に出さない。問題を抱えている生徒の側に、さりげなく居てくださったなあと、後になって気つく。

奥様が倒れられてから、三度の食事は先生が作られると言う。三年前までは山登りをされていた。同期の男性たちも数回一緒に登っている。師弟の関係を越えた厚情があったようだ。

毎年ご自分で撮られた美しい高山植物の年賀状をいただく。一昨年大腸がんの手術をされて心配したが、今年は自分で作った、きゅうり、とまと等を抱えた笑顔の年賀状を頂いた。

小松先生は私たちの人生の師でもある。

片山　徹先生。朝の一時限目の授業前の三十分に「聖書の話」があると聞いて参加した。七、八人いたと思う。物理の先生と聖書の取り合わせにも興味があった。

「神は愛なり」と言われても、神の存在そのものが分からなかった。信仰を持っていらっしゃる先生はいいなあ、という思いはあった。その後学生運動（安保闘争）等で、神からは益々離れていった。

それから十数年後私は受洗した。

三十数年のジグザグの信仰生活の末、今は神と共にいる幸せを噛みしめている。天国で再会したら、片山先生とたっぷり聖書の話をしてみたい。

書ききれぬほどの人生の先達

北原 久利（18期）

我が母校の先生の思い出は、指定の字数では書ききれません。お名前を書くだけで終わってしまいそうです。18期卒業ですので担任の先生は、A組大山　巌、B組丸山まつ、C組黒羽清隆、D組本吉　侃、E組深民民雄、F組工藤好吉の各先生でした。

私は工藤先生が担任でした。クラス会を4年に1回オリンピックの年に行っており、毎回出席され、卒業して何十年経っても当時のイメージがあるようで「立派になった」「変わった」と言いながら昔の話をされておりました。2008年北京大会の年にはまだまだお元気でしたが、昨年9月に永眠されました。

在学中は勿論、卒業後もお世話になった先生がいらっしゃいます。クラブの顧問で合宿のお手伝いでの春山秀雄先生。何度もお宅へ伺って、ご母堂にお茶を出していただいた野村精一先生。中大夜間部の講師をしていらっしゃる時に、親友の金子修一君と一番前の席に座り、入ってきた先生を驚かせ、講義後に居酒屋

15期のサイトに投稿されたメールの抜粋です

佐々木 浩二（15期）

----- Original Message ----- ①

Subject: [tokou-15th-alumni][00493] 山際先生の「それはエチオピア語か？」 皆さま、長沼です

山際先生が怖かったかどうかは別にして、授業でへんな英語を答えると、「それはエチオピア語か？」と言われたことを覚えているひとはいませんか？これは不思議だったのでずっと記憶に残ってました。なぜエチオピアなのだろう？

同じ１年のとき、人文地理の柴田先生は、ブラジルのコーヒーよりもエチオピアのコーヒーのほうが高級なのだと講義してくれたような気もします。

中略***

-----Original Message----- ②

Subject: Re: [tokou-15th-alumni][00495] 山際先生の「それはエチオピア語か？」長沼さん／皆さん、佐々木です

肝心な授業の中身はほとんど忘れてしまったけれど妙なことは結構覚えています。

・柴田さん：　口癖　"乾燥地帯と褶曲山脈"

"乾燥地帯と褶曲山脈"　⇒　地理学的に見て、褶曲山脈の下（そば？）には凸型の岩盤があり岩盤のふたの下に石油がたまる。

乾燥地帯の持つ意味についてはあまり記憶がないのではっきりとは申し上げられませんが、やはり石油が関係していたかと思います。この地帯はこれからとても重要になるというようなことを話されていたことを理解できず、法螺かななどと思いながら聞いていました。

・三木さん：試験にでた："…アラーの神以外に神はなし……"をアラビア語で書きなさい"アラー……"この意味と重要性は、卒業後何十年もたって、やっと理解できました。すごい先生に習っていたんですね。

----- Original Message ----- ③

Subject: [tokou-15th-alumni][00496] トリツ伝説、柴田孝夫先生編

佐々木さん、皆さん長沼です

三木亘さんの世界史のテストにそんな「アラー」の問題が出たことは覚えていないです。私のほうは、三木さんの授業では、「宗教的寛容」「宗教的非寛容」ということばは覚えていて、イスラム教の話題になると、三木さんを思い出します。イスラム教の都市は異教徒に寛容だったとよく言われるけど、いまイスラム教内部では内ゲバやってるのはなぜだろう？

****以下略（別の機会に）

工藤好吉先生を偲んで

小木 眞如（23期）

平成20年9月18日、工藤好吉先生が82年の生を全うされました。いつも日焼けしたお顔でニコニコと笑っていらっしゃったお姿が眼に浮かびます。同窓会報の誌面をお借りして工藤先生を偲びたいと思います。

周知の通り私たちが都高に通っていた昭和45～48年頃は、隣接する都立大学の学生運動が盛んで、毎日アジ演説を聞きながら登校し、騒然とした中での授業が続きました。その影響を受け、ヘルメットをかぶり角材を手に運動に参加する都高生も見られました。23Bにも活動に共鳴したクラスメイトも数人いました。

多感な時期の高校生に工藤先生は熱心に授業への復帰を促していましたが、世の中の矛盾への憤りと現実にすべき行動とは乖離したままで、先生と学生と間にわだかまりが生じてしまいました。お互いに心が通わず苦しかったに違いありません。

あれから30年、ご退職後お住まいされている町田で体育の指導をされていた先生が、23Bのクラス会に初めて出席していただく機会に恵まれました。平成15年6月14日、新宿モノリスに集まったクラスメイト29名の前で、元気なお姿をお見せになられた工藤先生は一人ひとりの教え子と歓談されました。そして問題の教え子と語らい、最後に握手をして散会することができました。周りで見ていた私は胸にこみあげるものを今も忘れることができません。30年の時がかかりましたが、気持ちを通わすことができて本当に良かったと思います。謹んでご冥福をお祈りします。

23Bは毎年2回暑気払いと忘年会を開催し、連絡を取り合っています。昨年の忘年会でも何十年ぶりかで参加してくれたクラスメイトが現れ盛り上がりました。来年3月には都高の学生はいなくなり寂しく思いますが、縁があって同じ時代、同じ学校に通った者同士これからも大事にして生きたいと思います。

出会った先生全てが恩師

岡田 晴道（27期）

入学してから三十余年の月日。1970年代の当時は、学校群制度（第二学区の23群で広尾高校・目黒高校と同じ）の中で大学の附属であり二学期制という風変わり、学園紛争の片鱗が垣間見え、新旧の流れが交錯していた様に思われます。

家から遠い、大学の進学率が悪いなどの理由で、希望校として望んで入学したわけではありませんが、卒業時には見事なまでに大人への一歩を踏み出したような自由な校風に染まっていました。今でも当時の学校生活は楽しく、昨日のように思い描き、懐かしい世界が広がります。不思議な高校であり、生活でした。

同好会に所属していた私、特定の先生との接点は薄かったように思えます。その分、一年・二三年次の担任は勿論の事、教科の先生、記念祭の窓口となった先生など、数多くの先生の顔が浮かんできます。

生物の斉先生、数学の新倉先生、地学の久野先生、地理の安食先生、古文の渡邊先生、体育の甲田先生、お名前は忘れましたが美術のライオン丸、家庭科の調理実習の先生など、強烈な個性を持った先生に出会えたことは幸せであり、貴重な経験をさせていただいたと思っています。好きだった先生、嫌いだった先生。生徒の主張を理解してくれた先生、生徒を対等な人間として尊重し扱ってくれた先生、原理原則で突き放した先生。学園紛争を経験され荒波を乗り越えられた先生、新任で来られた先生、マイペースな先生。多様な先生がいらっしゃり、色々な価値や考え方、人間模様に触れさせていただきました。

まさにそれが、枠にはまっていないことが、都立大附属高校であり、自由と自主性、規律の土壌を育み、今日の自分形成に大きな影響を与えてくれたと感じます。

思えば、特定の先生ではなく、出会った先生方すべてが、自分の恩師ではないかと。

●この項次ページへ続く

特集 思い出の部活動 連載：Vol.4

原稿募集：「思い出の部活動」を毎号連載しますので、部・サークル・同好会の歴史・現状などの原稿を募集します。
締め切り：毎年9月30日、本文：400字程度　送り先：〒158-0084 世田谷区東玉川2-3-15 野口貞義方　同窓会報編集室

男子バレーボール部

3年の春に関東大会に出場!!

渡辺孝一郎（4期）

小中：ぼくらの誇りは、昭和28年の関東大会に、東京代表で出場したことだね。2回戦で優勝した藤沢の高校に当って負けたけど…

渡辺：確か、東京からは憲法施行記念地区大会で準々決勝まで勝ち進んだ8校が代表校になったと思う。うちは、準決勝で都立隅田川高校に負けたんだ。

土屋：うちは地区大会用のユニフォームを作ろうといって、下着のランニングシャツをコーヒー殻で染めたんだよ。あれは渡辺の家でやったんじゃないかな。

小中：アズキ色で『都立』というネームをぬいつけたんだ。当時の都立附属の運動部では、バレーは断然強かったな。

渡辺：旧制からの伝統で練習は週2回で1回3時間。その割には強かった。もっとも、小中は練習嫌いで、よくサボって一度は破門にしたんだ。

小中：ボール拾いするのが嫌いでね。ほかにも演劇をやったり、女の子と付き合ったり、面白いことがあったから。

土屋：東京大会が近くなって、当時は9人制だったから、一人足りなくて、鳩首協議のけっか、呼び戻したんだよ。

小中：いやあ、あのときは嬉しかったよ。それからまじめになったね。

これは1989年11月5日号の週刊読売の「サークル同窓生」という記事から引用したものです。東京大会の初日は雨。いつも体育館で練習していた我々には恵みの雨でした。

我々の同期生（新制4期）は8人いました。昭和29年の卒業ですから、以来56年の歳月が流れたことになります。その間二人が他界しましたが、夏の合宿を含め、我々の代がコーチをした5～6年あとの後輩達とも、いまだに付き合いが続いています。

将に青春時代の懐かしい思い出の一齣です。

男子バレーボール部の今

アットホームなバレー部

男子バレーボール部マネージャー　石川絹恵（60期）

私達男子バレー部は、人数不足の状況でした。入部したころは人数も少ない上に引退を目前にした2つ上の先輩しかおらず、試合前に怪我人が出ると試合を棄権していたほどです。

しかし、部員を集めながら経験者のキャプテンと部長がチームを引っ張り、部員もそれに応えるように練習に励み、なんとか試合をできるまでの人数と戦力を身につけました。

最初は一回戦で敗退してばかりでしたが、学年があがり後輩が新たに加わったことで練習には今まで以上に熱が入り、ついに都内186校中48位という成績をおさめました。

先輩がいなかったことで私達の代は和気あいあいと練習をしており、みんなで練習や筋トレのメニューを提案しあい日々精進していました。このようなことから団結力が高められ、着実に実力をあげていくことができたのだと私は思います。

人数が少ない分アットホームな男子バレー部ならではの、このような雰囲気は後輩達にも受け継がれ、後輩達も日々工夫をこらして練習していたようです。

しかしこうして代々受け継いできたバレー部も、都大附を引き継ぐ桜修館には

●前ページより続く

生徒と向き合う熱意・誠意
英語の加藤良雄先生

石川恵子（35期）

3年間、クラス担任は英語教師の加藤良雄先生でした。当時、英語の授業はリーダー（読解）とコンポジション（文法）の2つがありましたが、加藤先生は、私たちのクラスではリーダーの授業を受け持たれていました。クラス担任としての先生の想い出、英語の教師としての先生の想い出をそれぞれ書いてみたいと思います。

クラス担任としての先生の想い出は、何といっても「クラス通信」です。2日に1回ぐらいのペースで、A3（だったと思う）1枚の紙に、手書きでびっしりと、生徒に向けてメッセージを発信してくださいました。日々の連絡事項のほか、クラスマッチや記念祭など、イベントにおける校内・クラス内の状況をまとめ書きしてくださり、クラスメイトが心を一つにして物事に取り組める下地を作ってくださったことを今でも覚えています。

英語の教師としての先生の想い出は、副教材の印刷物でした。文学作品の引用のほか、「ビートルズ世代」の人らしく、ビートルズの歌詞の引用もありました。クラス通信の発行にも通じるのですが、英語を楽しく学んでもらおう、という気持ちの現れと理解しています。

現在、定時制の高校で教鞭をとられています。数年前、定時制の生徒との日常について書かれた、ある団体の新聞向けの連載を拝見させていただきましたが、20数年前と同じ、生徒と向き合う熱意、誠意を感じました。

私たちの担任をされていたときは、校内でも「若い先生」に位置していましたが、来年3月に定年を迎えられるとのこと。時の流れの速さを感じ得ませんが、教職を離れても、何らかの形で、現役高校生に熱い気持ちでメッセージを届けて欲しいと思うのは私だけでしょうか…。

男子バレー部がないため、今年度をもって途絶えてしまいます。

自分の通った学校の名前がなくなってしまうのは悲しいことですが、こうして最後まで後輩達がバレー部を継いでくれたことをとても嬉しく思いますし、残した記録やバレー部ですごした思い出が消えることはないでしょう。

素晴らしい都大附での日々をバネに、都大附の卒業生として、社会へ出てもそれぞれに個性を活かして輝くことができたらいいなと思います。

女子バレーボール部

女子バレー部のこと

石井 典子（8期）

女子バレー部は、昭和27年、斎正子先生の勧めで、4期を中心に創設されました。当時女子の生徒は1学年50人に過ぎず、9人制のよちよち歩きのひよこで、男子と一緒に細々と練習をしていました。しかし5期に目黒の区立中学での経験者を迎えてチームの形を整えました。初代のコーチは男子と同じ1期の大塚福次郎でした。

やがてコーチに4期の土屋純夫、小中陽太郎、5期の高橋清彦、6期の吉田敬一が当たるなど代代卒業生がコーチとして熱心に後輩の指導をすることが伝統となりました。7期生が加わった時から、女子の第1回軽井沢夏合宿が始まりました。ご父兄が別荘を使わせて下さり実現したものです。浅間山の噴煙を見ながら汗を流したのが楽しい思い出です。その後、沼津の牛臥寮でも春合宿を行ったり、白馬村に変わったり、9期の宮内紀靖がこまめに面倒をみました。

しかし女子バレーが東京の強豪たちと伍して、戦うチームに変質したのは、甲田充彦先生が体育教師として赴任してからです。1学年の女子生徒数も100人に増えていました。21期の頃には、今でも目黒区のママさんバレーで活躍するような選手も登場しました。また25～27期生のチームは、東京都のベスト16になり関東大会に出場するという戦績を修めています。この時の経験者25Dの大浜あつ子（旧姓　疋田）は、その後母校の体育の教師（非常勤）を17年間勤め、後輩の指導に当たりました。

やがて、2層の体育館も完成し、女子バレーは、毎年3月末、男子と共同で、現役男女とともに「都立バレー部OB会」を開催、体育館で汗を流し、その後教室で交歓会を開いています。

母校が新しい形になり、体制が変わっても、9人制が6人制になっても存続し発展したように、都立バレーが同窓生の心の中に存続し発展し続けることを信じて。

（以上　いろいろな方から情報を頂いて纏めたものです。文責8A 石井典子）

女子バレーボール部の今

仲間を信じる全員バレー

第61期女子バレーボール部キャプテン　桜井 茜（61期）

私たち女子バレーボール部は都大附桜修館合同チームでした。都大附顧問の澤田先生、桜修館顧問の藤原先生と共に、都大附三名、桜修館十名で一年間頑張ってきました。

都大附の先輩方から教わった、技術や先生方など周りへの気遣い、仲間の大切さを桜修館へ伝えるために、私たち都大附生は、チームの目標として「仲間を信じる全員バレー」を掲げました。合同チームということで、特にチームワークを高めていくための目標です。練習中は互いに指摘し、ミーティングで意見を交換するなど、チーム内でのコミュニケーションを大切にしていました。合同チームだからこそ、よりチームワークを意識し、互いに高めあえるようになりました。初めは負けてしまう試合が続いたのですが、秋の新人戦では一部大会へ昇格することができ、目黒区大会では優勝することができました。一年限りのこのチームで結果を残せたことはとても嬉しく、自信にもなりました。一年間、苦労も多くあったけれど、私は都大附桜修館の合同チームは誇りに思えるチームだと、自信を持って言うことができます。

最後に私たち都大附から桜修館へ、「心で繋げ、強気で攻めろ」という言葉を入れた横断幕を贈りました。これからは桜修館という新たなチームで、さらに上を目指していってほしいです。時には悩むことも辛いこともあるけれど、バレーボール本来の楽しさを忘れずに、日々成長していってほしいと願っています。

都大附最後のバドミントン部

部長　金森 つばさ（61期）

男子は2010年5月23日、女子は6月6日に最後の試合を終えました。インターハイ団体予選、男子は2回戦、女子は東ブロックベスト16という結果でした。そして、本大会が都大附バドミントン部最後の大会となりました。

私たちは大会に向けて、基礎打ちやノック、チーム内での試合を主に練習を積んできました。

この大会を迎るまでにチーム内での衝突があり、うまく練習がまわらないのではないかと不安に思う時期もありましたが、時には自分達のプレーが出来ずに悩んだことや、いくつかのペア組み替えなども行いました。それでもミーティングを開き、各自が考え反省し、最終的には都大附最後のチームとして大会を迎えることができました。

試合では、その時点で最良のオーダーで臨むことができました。しかし、自分達の思い描くような試合運びができず負けてしまい、悔し涙を流した者も多かったと思います。それでも、全員がこのチームで試合ができて良かったと感じています。

最後に、退職後も監督として尽力してくださった戸塚先生、技術指導をしてくださった月村コーチ。多くの先輩方。そして、たくさんの時間を部活に割き、自分たちを想って行動をしてくれた顧問の横江先生。本当にありがとうございました。

吹奏楽同好会（吹同）創立の頃の思い出

「吹同」創立メンバー有志

吹奏楽同好会（以下略して吹同）は昭和39年頃、16期生（昭和38年入学）及び17期生（同39年入学）が中心となって設立されました。当時は音楽関係のクラブといえば音楽智識研究会しかなく、中学校でのブラスバンド経験者や楽器好きの連中が集まって、楽器を持ち寄ったのが始まりと記憶しています。当初はほんの数人で、クラブとしては認められない「同好会」でありましたが、徐々にメンバーも増えていきました。

楽器は自分持ちで、旧音楽室はオンチ専有のため練習場所もないので、放課後、旧校舎の2階の教室に集まって、プープー・ブープーやっていると、1階の教員室から先生方が飛んできて「ウルサイ、やめなさい、いつまでやるの！」と怒られたことも何回もありました。正式のクラブではないので、記念祭のステージにも出してもらえず、当時の新校舎の空き教室の一隅で、執行部委員の「君達の控え室じゃないんだから」などという罵りに耐えながら、演奏披露をしておりました（写真参照）。

演奏曲目は「士官候補生」とか「錨をあげて」とかのマーチものが中心で、現在のようなコンサート向けの編曲ものなどは考えられもしませんでしたが、それでもこのような活動が認められたのか、数年後には「クラブ昇格」を果たすことができ、正式のクラブにはなりましたが、皆「吹同」という愛称が好きでしたので、クラブなのに同好会という名称が何年も続くことになったのだと思います。

消えていくクラブもある中、現在では「吹奏楽部」と本来の名称を名乗り、立派に活動が継続されているらしいことを思うと、創立メンバーとしては万感の思いです。もはや昔の話ではありますが、創立の頃の話をさせて頂きました。なお、写真には写っておりませんが、女子部員も多数在籍していたことを申し添えます。

必死に取組んだ吹奏楽部

安藤 奈保子（58期）

私は平成17年の春に、都立大学附属高校に入学しました。小学5年生の時からホルンを吹いていた私は、迷うことなく吹奏楽部に入部し活動を始めました。当時の吹奏楽部は、部員が少ないながらも皆生き生きとしていて、なかなか演奏がまとまらない状況から何とか一歩前に進もうと頑張っていました。春のコンサートや夏のコンクール、記念祭などの演奏する機会を目標にして皆で音を聴き合い、音楽を作っていきました。

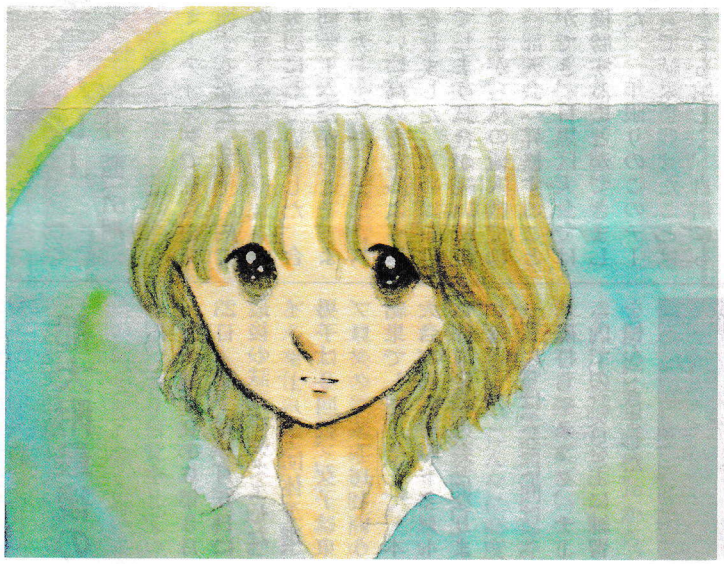
高校を卒業し、私は音楽大学に入学しました。今、同じ学科の友達が作曲した吹奏楽の曲に皆で取り組んでいます。音大には、当たり前のように楽器が吹ける仲間がそろっていて、楽譜を見て音を出せば、もうそれなりの形になってしまう…そんな環境の中で音楽をやっていると、なんだか物足りなさを感じるときがあります。高校生の時のように、一つ一つの曲にこだわりを持って取り組み、演奏を聞いてくれる人が楽しくなるような演出をみんなで考え、仲間や先生と一緒に悩んだり泣いたり笑ったりしながら音楽を作り、うまくいかないからこそ毎日のように集まって練習する…そんな必死さが、今の自分にはあるかな？と最近よく考えるんです。

振り返ってみて「必死だったなあ」と思える活動が出来た高校時代に感謝し、当時の自分に負けないように、これからも音楽と向き合っていきたいと思います。

漫画研究会創立の思い出

土屋 晶子（30期）

今回の原稿依頼を受けて振り返ってみると、もう卒業してから30年以上過ぎてしまったことに驚いています。私は、小さい頃から絵を描くのが好きで、学校のノートは、勉強のノートなのか、落書き帳なのか？といった感じでした。自宅でもスケッチブックに水彩画のイラストを暇があれば描いていました。漫画は読むものももちろん大好きでした。



都立大学附属高校に入り、入った部活はなぜか軟式テニス部でした。高校に入って心細かった私は、同じ中学校からきた友だちの選んだ部活に入ってしまったのです。でも、運動が苦手な私が案の定ついていけるわけはなく、夏にやめることになりました。そこから、「やはり好きな漫画を部活に!!」と思い、漫画やアニメ好きの友だちと漫画研究会を立ち上げて活動を始めました。部室もありませんでしたから、自分たちがやろうと思えばすぐに部活になるような気楽さがあり、『何かをしなければならない』というプレッシャーもなく、好きな絵を描いたり、漫画やアニメに没頭できて幸せな時間でした。

記念祭では、自分たちで描いた絵を披露したり、映画を上映したりしましたが、お客さんを楽しませるより、自分たちが楽しんでいたのかもしれません。友だちの家に泊まって、夜通しアニメの話をしていたこともありました。（それも、部活だったのかな？）

私は大学に行っても漫画研究会に入り、相変らずイラストを描いていました。高校の同期の友だちの中には、本格的なアニメーターになった人もいます。私はその道で食べていける程の腕前はなく、あくまでも趣味の域は超えませんでしたが、児童館に勤めている現在、ちょっとしたポスターやカットを描くには苦労しなくてすんでいます。

今はなかなか、ゆっくりと絵を描く時間がありませんが、あと10年ちょっとして退職して時間に余裕ができたら、また絵を描いてみようかなと思っています。

寄稿

第二期生（元旧制府立高校尋常科）「旧制高校OBテニスインターハイ」の府立高校チームに参加 連続全国制覇に貢献

ご存知のように、全国の旧制高校は戦後の教育制度の改革で、1949年に廃止され、それに伴い旧制府立高校は都立大学に、中等部である尋常科はその附属高校となった。（その後都立大学は首都大学東京となっている）

旧制高校時代は種々のスポーツ種目で、全国大会としてのインターハイが開催されていたが、わが府立高校は多くの種目で活躍し、バスケット部等では全国制覇をしている。

旧制高校廃止後、そのOBのテニス愛好者が昔のインターハイをOBでやろうという事となり、今年で第39回目を数えるに至った。しかし出場者の高齢化が進み（80歳に近いか又はそれ以上）段々と出場者の数も減り、本年の第39回をもって幕を閉じる事となった。

本校の第二期生は、元旧制高校の尋常科であった事、また年齢も旧制高校生に近いため、このインターハイへの参加が許され、第36回頃から参加をしていた。旧制府立高校のOB選手に二期生を加えた7～8名のメンバーは、3チームのダブルスを組み、全国の旧制高校OBチームと団体戦を行った。参加する旧制高校は、北は弘前高校から、南は鹿児島・七高まで全国二十数校に及ぶ。

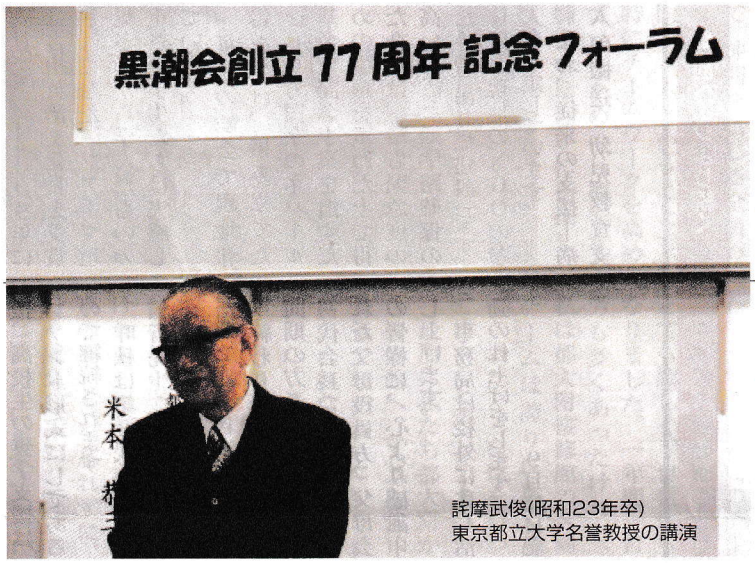
第38回及び第39回の大会（二期生からは、第38回は柴山、黒田、第39回は柴山、中田、黒田が参加）は、有明テニスの森公園で開催されたが、府立高校チームは連続優勝の栄誉に輝いた。第38回は、まず予選リーグで成蹊、浪速、三高を破り、準決勝で五高、決勝で一高を破り優勝し、最終の第39回では、予選リーグで三高、高知、成蹊を破り、準決勝で二高、決勝で姫路を破り、第38回、第39回と連続して全国制覇を成し遂げた。

尚、全国制覇は府立高校としては、大会第1回目参加以来初めての快挙であり、且つ又連続制覇は極めて栄誉ある成果であると言えよう。

（文責：黒田定明）

寄稿

「継続は力なり！」黒潮会創立77周年記念フォーラム開催



詫摩武俊（昭和23年卒）
東京都立大学名誉教授の講演

黒潮会（会長：高品 斉 8期生）は、府立高、都立高、都大附高それぞれの水泳部の継続された唯一無二のOB・OG会である。

本年度は、府立高水泳部が1932年（昭和7年）3月に初めて卒業生を送り出してから77年目の記念すべき年に当たり、このイベントは本年3月13日に実行し、桜修館サイドからも大いに歓迎・評価された。

激動と変革の我国の現代史のなかで、府立高等学校、都立高等学校、東京都立大学附属高等学校と名称こそ変わったが、各時代の水泳部の卒業生は「黒潮会」に入会して、未曾有の試練の大波を泳ぎ越えてきた。

昭和17年の全日本インターハイ水球全国制覇も含めて、戦後は、同じく全国インターハイ水球第3位等の輝かしい戦績を誇っている。現在60校余の東京の国・公・私立高校が参加する大きな大会に成長し、レベルの高い「16高校水泳大会」（於・辰巳国際競技場公認50mプール）は、黒潮会OB有志の呼びかけで始まったもので、準備会・大会第1回目から現在まで50年間、都大附高は参加している。男子団体で4位になったこともある。

現在会員数も500余名。名簿をめくると第2次世界大戦の戦死者6名という凄いドキュメントもある。元運輸大臣、一部上場の元社長、各分野の大学教授、水泳インストラクター等々人材は多士済々で、日本はもとより海外でも活躍している。もちろん悠々自適シルバーを楽しんでいる大先輩も多い。

これは、八雲が丘に素晴らしい7コースのプールと部室が戦前から存在し、水泳の好きな奴が集まって水泳部をつくり、この同じプールで泳いだ仲間は、学校名が変わっても、同じプールで水泳部生活を謳歌した仲間意識が特に強くそれは醸成され、正に「継続は力なり」になっている。

それはいつも昔から先輩が手弁当で、つまりボランティアで、水泳を厳しく優しく科学的に現役をコーチする伝統があるからだと、高品会長は述べている。自由と自治の伝統的精神は、プールサイドや部室に満ち溢れ、もちろん鉄拳制裁などという軍国主義的な行為は、戦前から現在まで皆無である。

青春を謳歌し、人生を議論し、芸術や恋愛に悩むことはあったろうが、現代で言う「鬱」や「イジメ」なんかはとうてい考えられなかった。自主的で自由な雰囲気の中で「水泳」と言う意外と奥深いスポーツ文化そのものが、いまでも人間性豊かに脈々と生きていると、彼は強調している。

本年度は、都大附高水泳部は高3のみとなり附高としては最後の卒業生となる。一方、中高一貫6年制の東京都立桜修館中等教育学

●この項次ページへ続く

ネパール会を閉じるにあたり

村上 芙佐子（元教諭）

旧制の伊藤邦幸医師（1951年卒）の小さな講演会が契機となり、ネパール会がスタートしたのは16年前ですが、伊藤先生とネパール会の出会いは更に斎先生時代に遡ります。が、それは略します。

ネパールの人々とともに生きることを志した伊藤さんは、設立準備中に62歳で逝去されました。「若者よ、目をアジアに向けよ。アジアを体験せよ。」との呼びかけを遺して。

ほぼ10年に亘るカトマンズの私立学校との交流（主に奨励金支援）を了え、垣見一雅さんと出会ったのは12年前でした。かつて伊藤さんは「まずオカルドゥンガ（東部）まで歩いて来なさい（工程約7日）」と言われましたが、彼の地に代わって垣見さんの活動拠点ドリマラ村へのツアーが実現したのは2000年春でした。

マオイスト情報で中止した年を除き、在校生とOBのスタディー・ツアーが6回、個人調査旅行を含めると約10回、延べ50人余がネパール体験をしました。全回森 慎一先生が同行しましやが、同先生の異動で中止となりました。

村に根を下ろしている垣見さんは、1997年に国王から「ネパールの片腕賞」を、昨2009年には吉川英治文化賞を受賞されました。ツアーで垣見さんから学んだものの重さを学生たちは実感しています。

毎年の総会で現地報告を受け、積み立てた200万円余のネパール基金で記念事業を遺すための協議を重ねた上で得た合意は、最も緊急度の高い「水」と通学路確保のための「吊り橋建設」です。住民と現地のNGOの参入を予定しています。

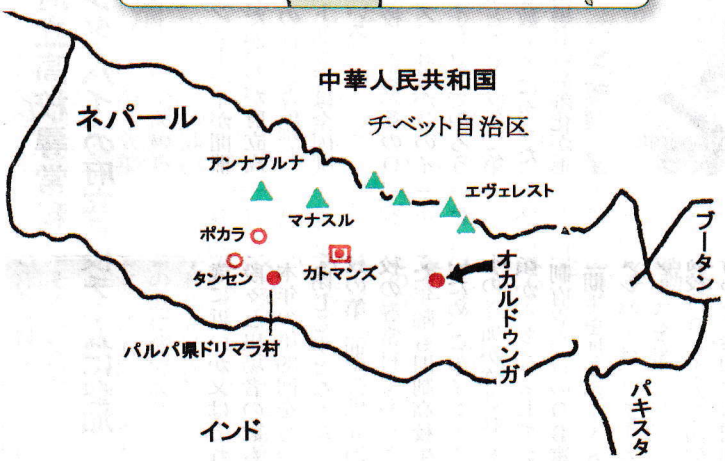
なお、従来の支援―病人の搬送、幼児教育支援、高校生の奨学支援は、ファンド形式にしてあるので継続されます。

昨秋は第3代会長の堀信行先生（元校長・都大名誉教授）らが実踏されました。

終わりに、伊藤さんと同期の方々を含む会員方、初代会長（母親）、続投された父母役員方、父母会の皆様に、心より感謝申し上げます。

事務局は校外に移し活動の仕上げをします。

9月15日記



●前ページより続く

校の水泳部は中1～中5となる。

実際には同じ屋根のもと、同じ水の同じ2階の室内プールで仲良く練習をし夏合宿も合同に行っている。熱心で真面目な若い黒潮会会員（都大附高卒業生）がコーチ陣となり真摯な水泳指導をしており、黒潮会はコーチに対して経費の一部を援助している。

このような状況のもと、黒潮会としての正しいPRをし、桜修館サイドとの相互理解と友愛をより深めることを目的に、「黒潮会創立77周年記念フォーラム」を次の通り開催した。

日　時：2010年3月13日（土）午後1時30分から4時30分まで

会　場：桜修館中等教育学校視聴覚教室

基調講演①「中高一貫教育における心理学的発達の意義」
詫摩　武俊
東京都立大学名誉教授（心理学）

基調講演②「水泳部生活で得たもの」
米本　恭三
前東京都立保健科学大学学長、慈恵医大名誉教授

パネル・ディスカッション：「プールサイドで求めたもの」

パネラー：大久保　利晃　前産業医科大学長、放射線研究所理事長・所長
同　詫摩　武俊（前掲）

コーディネイター：高品　斉

なお、会場の都合で、聴衆参加者は、現役の水泳部員約50名と直近5年前卒業程度の若い会員20人を中心に、桜修館の須藤校長、水泳部顧問近藤悦子先生等も参加した。

最後に須藤校長から、「本日は素晴らしいフォーラムを有難うございました。伝統ある黒潮会の喜寿のお祝いに、こんなに高度な内容の講演会が聞けて、うちの生徒も幸せと思います。

最後の質疑応答時間のやりとりを見ていて、将来どんな仕事についてどんな自分を創ってゆくか、どんな人生を目指すか、について現役生徒のみなさんがはっきり自覚をしているのに、大変心強く思いました。

社会で活躍している先輩の話を聞き、質疑応答をしながら社会を一部でも理解することは、教育上本当に重要だと思います。

是非、黒潮会が桜修館中等教育学校のなかで『継続は力なり』をモットーのもとに、これからも桜修館の水泳部発展のためにご活躍されんことをお願い申し上げます。学校側も大いに賛同しております」と挨拶された。

なお当日、プールのボトムミラー一式、デジタルビデオ映写機一台が水泳部に黒潮会から目録贈呈された。これらは桜修館水泳部のために大いに利用されるものとなっている。

また、当日午後6時半から、桜新町のイタリアンレストランにて77周年記念パーティが開かれ、会員約70名の参加で盛大に開催された。前水泳部顧問藤井かね子先生からのお祝いの素晴らしいメッセージも披露され、また会報「黒潮」第45号（特集創立77周年記念）も発行され会員に配布された。

まだまだ黒潮会は力強く継続され発展している。なお平成23年度から黒潮会会長は11期生の河北紘明が就任する予定。

母校の閉校記念「校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌集」DVDによせて

その時・その時代

旧制府立（都立）高校の歌たち

吉松 安弘（2期）

且っての日本の旧制高校のように、自分たちの母校の歌が次々と創られ、生徒が共に歌う曲をふんだんに持っている学校、学校群は、世界でも他に例がありません。

旧制高校は多くが全寮制だったので、これらの校歌・学生歌・記念祭歌・応援歌などは、ひっくるめて「寮歌」と呼びならわされており、四十校近くあった旧制高校の寮歌すべてを集めると二千三百曲に及ぶとか。近代日本の各時代の知性を自負する若者たちの切実な想いが込められているこれらの寮歌の数々も、今やそのほとんどが忘れ去られようとしている現状は、いかにも残念です。

都立大学附属高校が校歌を引き継いだ府立高校～昭和十八年に改名した都立高校は、わずか二十年の歴史ではありましたが、その生徒も時に応じて希望や苦悩を歌に託し、その志をみんなで歌い合ってきたのでしたし、これが五十曲余の府立高校寮歌として遺されています。

それはちょうど昭和の激動期、戦前・戦中・戦後の非情かつ異常な時代をまたいだものですから、数々の歌は府立高校生の時代との格闘を、そして府立高校の伝統や校風を世に示しており、日本社会の転変についての重要な歴史的証言にもなっています。

自分たちの歌を創り、母校に遺してゆくこの伝統は創立当初の都立大学附属高校にも受け継がれ、毎年、記念祭のたびに新しい歌が創られ、歌い継ぐべく努められていたのでしたが、学校の性格がかわり、時代も、生徒も変わり、やがてこの倣いも失われていったのでした。

校歌「嗚呼西山の」

府立高校が創立されて三年、八雲が丘の新校舎に移転した昭和七（1932）年になると、われわれも歌を持とう、まずは校歌を創ろうとの機運が高まり、全校から募集をしたのでした。しかし多くの賛同を得る詞が無く、入選作が現れるまでにはまた三年を要しました。作詞者は高等科一年の理科生、作曲者はドイツ語教授、当時の校歌としては珍しい三拍子です。

ところがこの曲、府立高校創立者ともいうべき校長の気に入らず一大事。彼は校歌に合わせて全校生徒の行進する晴れやかな光景を心に描いていたのです。

そこで校長は急遽、当時名声が高かった陸軍戸山学校軍楽隊に作曲を依頼、すぐに「マーチ・嗚呼西山の」が出来てはきたのですが、今度はそれが学生たちに不評、「幼稚園的寄木細工だ」「撲殺してしまえ」などと物騒な声さえ聞こえてくる。

結局、二曲をともに校歌とし、あとは自然淘汰に任せようと衆議一決、断然残ったのがこの三拍子なのでした。母校を讃える詞といい曲想といいまことに穏当、校歌にふさわしい歌と云えるでしょう。

学生歌「嗚呼烈誠の」

創立間もないころの府立高校には、当然のことながら歌がありません。「われわれにもっと歌を！」「われわれ府立高校独自の歌を！」「府校生の唄う歌が流行歌と他校の寮歌になってしまうぞ！」このような声に応えて、校歌の定まった翌年につくられた歌です。

寮歌の伝統と常道をよくていし、漢語を散りばめつゝ感傷をこめて想いを語り、ゆったりとしたリズムで荘重に歌い上げる、誇り高き高校生の放歌高唱によく似合う歌ですから、盛んに歌われました。

旧制高校では、全高校対抗のスポーツ大会「インターハイ」に母校の栄誉をかけます。そこでは、太鼓を叩き母校の寮歌を歌い合う応援合戦も盛んに、烈誠の士が腕をかざしつつ潔き使命を思うこの「嗚呼烈誠の」は、試合に負けた時にもよく歌われたのでした。「士にかかる」を「死にかかる」とイメージ、劣勢に倒れた勇者を讃え、桜吹雪の降りかかる姿を想ったのです。

学生歌「青春といふ」

なんという直截な歌詞、なんという明快な旋律でしょうか。紅顔の青年が八雲が丘に立ち、みなぎる生命を輝かせ、雄叫びをあげて戦う決意をうたいあげた府立の人気曲です。

学校創立から九年、充実期を迎えた府立高・昭和十三年の記念祭に向けて創られた歌で、前年から始まった中国との戦争が日本国内に暗い影を落としてはいましたが、戦局は断然有利、満州には新天地を求める多くの日本人が入植して開発に努め、国際的にはドイツと結んでアジアを犯す植民地大国米英に対抗しようと、日本政府は「大東亜共栄圏」を提唱。

府立高校生にも、当時の「大日本帝国」にも、不安を乗り越えて新しい未来、新しい発展、新しい世界秩序に挑む、青春の気が充ちていたのでした。

文乙歌「いざ友、歌はなむ」

一晩でこの歌をつくったという作詞作曲者は、入学した府立が大好きになり、長く府立の学生で居たいため落第と留年を繰り返し、七年の終業年限に十二年半をかけた豪傑。それも最後は、戦争中の年限短縮によって強制的に卒業させられたのでした。

この歌は、選ばれし者である自分たちの明るい未来を力強く告げ、歌う者に勇気を与える分かり易い詞、声高らかに歌えるの旋律ですから、府立の学生は誰もが暗誦して高唱しました。独りで歌うも好し、みんなで歌うのはなお好し、気持ちの良い歌なので対校試合に勝った時などに好んで歌い、勝利に酔ったのです。

文乙とは文科の乙類でドイツ語を第一外国語とするクラス、当時のドイツは哲学、文学、音楽、医学、軍事学などの分野で本流とみなされ、同盟国でもあることから人気が高かったのでした。

作者は、このほかにも幾つもの美しい寮歌を作曲している「府立のシューベルト」です。

第五寮歌「紫の霞煙れる」

学生寮のなかった府立高校にも昭和十八年末、学校から東に五分ほど坂を下った呑川べりに寮が出来ました。旧制高校の寮には、肩を組んで乱舞するストーム、窓から小便をする寮雨、眠気を払って勉強し元気を出すための寮歌が付きものです。

太平洋戦争はすでに全戦線で日本軍の敗退が始まっており、生徒はしばしば軍需工場などに動員され、学校の授業も満足には行われなくなっていたのでしたが、そんな時局を斜めに見つつ、府立の学生たちは普遍を求めて次々と幾つもの寮歌を創り、歌ったのでした。

現在の日本社会は「濁り充つ眠りの巷」「木枯らしの吹く荒野」のようだが、われわれは友と語らいつつ「一筋の清水の流れ」となろう、「晴けき空を仰ぎつつ」「茨を踏んで歩き続けよう」。

軍閥独裁政権の下、敵国

欧米文化の勉強が制限され、読書や表現の自由も奪われた中で、なおも未来を信じ、真理を目指して苦難の道を行こう、彼方にはあこがれの星が瞬いているではないか、と呼びかける歌。哀歓をこめた節回しのうちに力強さも秘められた、歌いやすい名歌で、創られた時勢をおもんばかると感慨深いものがあります。

第62回記念祭「同窓会くつろぎルーム」で寮歌を歌う「一士会」の皆さん

最後となった「2010年日本寮歌祭」で寮歌を熱唱する府立高校OBの皆さん

第八寮歌「春残更に」

昭和二十年、無条件降伏を控えた春の終わり。東京は連日連夜の空襲にさらされ、学校は校舎こそ焼け残っていましたが、明日をも知れない運命。日本の多くの町が焼け野原になっていった時代、大勢の人が死に、学校での授業は全面停止とされた時代、それなのに「平和」の二文字を口に出しただけで罪人とされた時代、そのような時代に創られた歌です。

軍や警察に指弾されないよう、歌詞はことさら難しい漢語を使って韜晦し誤魔化してはいるものゝ、仔細に、注意深く読めば、戦火が迫り、道義も地に墜ちた闇夜のような日本の現実を憤り、我らが立って、この八雲が丘から警世の鼓鐘を響かせよう、声なき声を広げよう、と必死に叫んでいる作者の姿が、また、その歌を共に歌う都高生の表情が、容易に見て取れるでしょう。

当時の生徒の一人はこの歌について「身も心も浸りきって歌える唯一の歌」であり、「心の歌」として愛唱した。「数千にも及ぶ旧制高校のどの名歌にも勝る、本当のぼくらの青春の歌だ」と語っています。

その通りです。誰がそれを否定など出来ましょうか。

学生歌「挙げよ盃」

昭和二十年（1945）年、戦いに敗れた年の秋。

都立高生にも戦争で親兄弟を失くした者、戦災で家を失った者は多く、すべてを失くして毎日の食べ物にさえ事欠いたのでしたが、ただ、希望だけは今よりもはるかに大きいものを抱いていました。自分たちの生命力、青春の感受性、可能性豊かな人生、自分たちが新たに創ってゆくべき自由な日本の社会、そして、そのための勉強を支え育んでくれるわが母校都立。この明るい気持ちをそのまま、ためらうことなく謳い上げる歌が「挙げよ盃」なのでした。

元々はドイツ学生歌だったらしく、アメリカメイン州立大学の学生歌となっていたこの歌。音楽評論家・堀内敬三が息子の在学していた都立のために訳し、記念祭のクラス合唱で歌われるや、たちまちキャンパス中に広まり、これを都立の学生歌として頂戴することになったのです。パクられるほどに良い歌であることを証明され、メイン大学もさぞ喜んでいることでしょう。

昭和二十一年インターハイ、都立の応援団はこの歌を引っ提げて他校を圧倒、バスケット部を全国優勝に導いたのでしたし、当時のコンパでは、何回でも繰り返しが自由なこの歌をみんなで歌い、スピードを上げて早口の個所を懸命に発音しつつ果てしなく続け、ついには倒れるまで歌うのが常でした。

酒に酔って倒れるのではない。この盃に入っているのは酒ではなく、青春であり、青春の志しであり、我らが母校なのです。

このDVDでは、余計なところで「お、」が入り、少々通俗にしているのが残念です。

終り

新制第一回記念祭の頃

野口洋二（1期）

数えてみると、第一回の記念祭歌が作られてから今年で六十一年になる。

学制の改革で名称は変わったものの、当時のわれらが都立新制高校は、かつての都立高校尋常科そのものであり、良きにつけ悪しきにつけてその伝統を受け継いでいた。それでも、何か新しい歴史を開こうと皆が思っていたのではないか。新しい記念祭歌を作ろうという機運が起こったのもそのためであろう。そしてその思いは、詩人を志していた政石　浩と、後にわが国を代表する作曲家の一人となった三善　晃によって見事に実現された。

その頃の世の中は、戦後の混乱の極みにあったと言ってよい。この記念祭歌が作られた昭和二十四（1949）年には、七月から八月にかけて、下山事件、三鷹事件、松川事件などの正体不明の大事件が次々と起こり、社会は混迷の度を深めていた。しかし、その中にあってわが都立新制高校は、校舎は決して立派なものではなかったが、優れた熱心な教師たちに恵まれ、俊才が少なくなく、勉強好きの者、絵や音楽に熱中する者などなど多士済々であった。

そして目指したのは自由と自治である。これはイギリスのイートン校をモデルに発足をした旧制都立高校の伝統を受け継いだもので、実際まことに自由な空気に包まれていたように思う。時には自由過ぎるところもあった。今だから云えるが、未成年のくせにタバコは吸い放題。記念祭の晩などには、どんぶりで焼酎を回し飲みをしたものである。それでいて、それぞれが自己を律する節度もちゃんと弁えていたように思う。

ともあれ、都立大学附属高校は平成二十三年に閉校になるという。かつての生徒、それも第1回の卒業生としては、一抹の寂しさを覚えずにはいられない。だがそれと同時に、新しく創られる桜修館中等教育学校が、都立の良き伝統を受け継ぎながら、立派に成長することを心から願っている。

母校最後の記念祭に同窓会が出展

母校の最後となる「第62回記念祭」が、晴天の9月11日(土)12日(日)に開催されました。今回学校から、当会と府立高等学校同窓会に、「ネパール会の閉鎖(10ページ参照)により部屋が空くので両同窓会で使用しては」との提案があり、府立高校同窓会と相談の結果、「記念祭に訪れる両同窓会会員の休息と懇談の場と、都大附と桜修館の生徒に80年の歴史と伝統を認識してもらうこと」を目的に、A棟4階のLL教室に「同窓会くつろぎルーム」を出展しました。

内容は、

❶「八十年の歴史を映像で確かめよう!!」をテーマに、創立70周年記念として制作された「鳳雛(ほうすう)たちに乾杯」のDVD上映と、当会が制作した「校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌集」DVDの試写

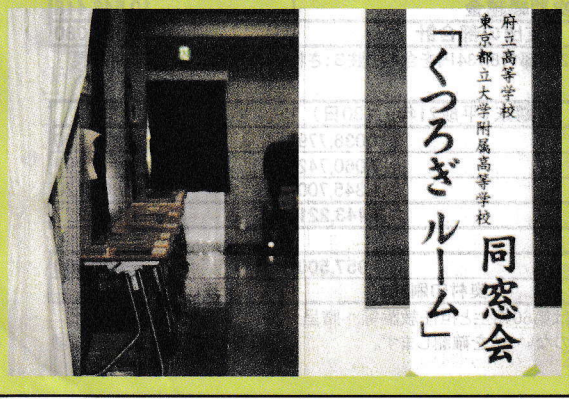
❷「先輩と校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌を歌おう!!」

❸「府立高等学校の歴史的資料の展示」です。

初日の午前11時30分からは、府立高校の有志「一士会」の皆さんが来校し、校歌・学生歌・寮歌を朗々と歌ってくださいました。

来年からは桜修館だけの記念祭となりますが、"記念祭"という言葉は継承されると言われており、両同窓会は企画を練り直し、再度出展を予定しています。　八十年の伝統を受け継ぐ6年制の中等教育学校「桜修館」の新しい記念祭に是非ご参加ください。

日時等は同窓会のHPでお知らせします。



新制第二回記念祭の頃

作曲者・於田和光（2期）

私たち2期生が旧制の尋常科から本校に編入されたのは昭和24年でしたが、当時の学校は2年生(1期生)2クラスと私たち1年生3クラスの2学年だけでした。私たちから3クラスになったのは、都立高校としては初めてて男女共学になったからです。男子は中学校、女子は女学校という長い伝統が崩れたのですから当時としては大変なことでした。1期生には申し訳ないことですが、男女共学の高校卒業生としては私たちが1期生であったとみることもできます。

部活といわれるクラブ活動にも大きな変化がありました。これまでは女学校などとの協力で行われていた男女合同の活動が自前でできるようになったのです。早速、混声合唱団が結成されることになりましたが、立ち上げの企画や1年生女子の勧誘は男子クラスだけの2年生の主導でしたので、私たち1年生男子は、恐る恐る参加させていただいていました。

2年生には逸材が揃っていて、選曲、伴奏、指揮・指導からクラブのマネージメントまですべての面に生徒の自主性が発揮されていました。しかし、当時の男子生徒の多くは小学校では軍歌、尋常科では寮歌を叩きこまれていたので、混声合唱の場では調子が合わないという評判をいただいていました。

このため、この合唱団は「音痴クラブ」と愛情をもって揶揄されるようになりましたが、漢字で書くのには遠慮があったようで、私がリーダーを引き継がせていただいた頃の部活の通称は、音痴でも音智でもなく「おんち」になっていおたと記憶しています。

翌年、3学年が揃ったところで「東京都立大学附属高等学校」という立派な校名をいただき、「おんち」も音楽部らしく充実して、室内楽団の編成、演劇や放送劇の音楽などにも活動が広がってきました。「音楽知識研究会」とか「音智」と称されるようになったのは私たちが卒業した後のことですが、この「おんち」を立派に育てていただいた方々に感謝し厚く御礼申し上げます。

新制第十七回記念祭の頃

作詞者・前田　保（17期）

不思議な縁だ。高校時代には蓋をしたいという思いがつよく、同窓会などもお断りしてきた。そんな私を狙い撃ちするように今回の執筆依頼が来た。よりによってなんで自分が、と思いつつ書く。

私が作詞し大築　準さんが作曲してくださった記念祭歌は「晩夏に集う」である。執筆依頼でそれが昭和40年の記念祭であったことを知った。1965年だったかと思う。

一連きりのその歌詞は、ベトナム戦争抜きには語れない。「晩夏に集う若人の眼(まなこ)は戦いの火に憂い」と歌詞冒頭に書いたが、その「戦いの火」はベトナム戦争を指している。当時、私的な事情を措けば、ベトナム戦争とそれに加担している日本というのが高校生にとって不安と怒りの根源だった。それを意識して歌詞を書いた記憶がある。

冒頭から続く歌詞「若い命は叫びあい、この日の山にこだまする」というのは記念祭のファイヤーをイメージし、そこに抗議の叫びを重ねた部分である。ついで「ああ団結のこの力　われらの熱き血をもって　世界の夜空に灯をともさん」となる。さすがに時代がった詩だが、これを受け入れる精神風土が都立大附属にはあったように思うし、なによりも大築さんの曲の力を感じざるをえない。

高卒後、1968年、私は一浪して大学に入ったが半年で封鎖になった。学生反乱の時代だ。じつは封鎖した学内に私はいたのだが、あの時代の大衆運動はほんとに不思議なものだった。高校時代の正義感はすぐに乗り越えられて運動は何と自分の生きざまを問うてきた。私は自分を嫌悪したが、それも含めてあの時代の動きの背後にベトナム戦争があった。

後年、迷ったあげくに復帰した大学への道で、三年時の担任・三木　亘先生にばったり会った。言下に「ずいぶんさっぱりしたな」と斬られたたが、あの記念祭歌は「ソンブル・ディマンシュ sombre dimanche」の日々を送っていた高校生の、時代への置き土産なのであった。

(2010.7.28記)

盛んな 同期会・クラス会・同好会レポート

第4期生の集い2010

日時：平成22年6月5日(土)12時30分より
会場：市谷「プオーノ」
参加者：34名

隔年開催の今回、後期高齢者となった記念の集い？は、3名の逝去者があったものの前回と同じ34名が参集。母校閉校関連行事の報告、画家としてお元気にご活躍の喜多迅鷹先生恒例の15分授業の後、思い出話に花を咲かせましたが、この年頃になると高校(青春)時代が無性になつかしく、校歌を熱唱してお開きとなりました。

（野口貞義・記）

第10期生同期会 50周年記念

日時：平成22年5月22日(土)12時30分より
会場：ビヤステーション恵比寿
参加者：51名

卒業50周年の同期会を開催しました。開会の挨拶とともに、前回から5年間に亡くなった5名の方々に黙祷し、閉校となる母校の変遷の様子や閉校までの行事についてもお話ししました。

北は札幌、西は徳山から、初参加者もあり、4人リレースピーチ、グラス片手に弾む歓談、時刻はあっという間に過ぎました。「音智」のリードで、校歌、青春という、文乙歌を合唱し、3年後の再会を約束して散会しました。

（徳井　巌・記）

東京都立大学附属高等学校同窓会　平成21年度収支計算書

平成21年10月1日～平成22年9月30日（単位:円）

収入の部		支出の部	
摘　要	金　額	摘　要	金　額
記念碑募金（334名）	2,401,000	会報費(註1)	1,720,780
名簿売上（@2,500円1部）	2,500	印刷費(註2)	129,834
第60期生会費(月120円×12ヶ月×3年×162名)	699,840	通信費	40,290
預金利息:さわやか信金(普通)	222	評議員会議費	68,356
みずほ銀行(定期)	11,297	会議費(HP)	1,680
小　計	3,114,859	交通費	9,730
		事務用品費	2,922
前期繰越金	9,443,221	手数料	2,390
		慶弔費	0
		名簿保管料	0
		記念碑費	0
		募金振込手数料	35,380
		過払い分(註3)	270
		小　計	2,011,632
		次期繰越金	10,546,448
収入の部合計	12,558,080	支出の部合計	12,558,080

註1：発送費828,090円(9,201部×90円)を含む　註2：平成22年4月発行の名簿補遺印刷代200部118,734円を含む　註3：さわやか信金口座へ来期返戻

財産目録（平成22年9月30日現在）

科　目（銀行、郵便貯金）	当期末(平成22年9月30日)	前期末(平成21年9月30日)	増　減
さわやか信用金庫(普通)	760,589	1,036,779	△276,190
みずほ銀行(定期)	7,072,039	7,060,742	11,297
ゆうちょ銀行(振込口座)	2,713,820	1,345,700	1,368,120
合　計	10,546,448	9,443,221	1,103,227

平成21年度名簿在庫	535,000	957,500	−422,500
内　訳(単位:部)	奥村印刷212＋野口2＝214	奥村印刷383	＊差し引き169減

＊169部中1部は売り上げ、168部は第60期生と担任教諭等へ贈呈

監査報告：提出された平成21年度の原簿等を精査し、収支計算書、並びに財産目録に誤りのないことを確認します。　監事代表　新井正己　㊞

第14期同期会

日時：平成22年10月9日(土)
会場：ヴァン・ブルー
参加者：91名

五年ぶりの同期会は、レインボーブリッジを望む優雅なワインレストランで催されました。今年度中に前期高齢者(65歳)となる集まりで、「だれが生徒か先生か」分らない程お元気な喜多先生と渋谷(田中)梢先生のご挨拶に始まり、今は亡き友七名の若き姿を会場のスクリーンに映写し黙祷を捧げ、クラス代表が近況やユニークな体験を語り、歓談中はスクリーンに高校時代の懐かしの映像が流れました。校歌・寮歌・記念祭歌の歌詞もカラオケ方式で表示され、会場を揺るがす感動の大合唱を導きました。

某君いわく、「これだけ盛り上がった同期会は、これが最後かも知れない」(秋山清太郎・記)

肩を組んで校歌を熱唱

第20期C組クラス会

日時：平成22年4月22日
会場：自由が丘「南国飯店」
参加者：15名

我々20期(昭和45年卒業)のC組は何年かに一度クラス会を催しており、今回は卒業40周年を記念して開催しました。

その日は昼から有志が都立大学の跡地を散策し、都高の正門前で記念撮影。クラス会は15名の参加でしたが、5名の仲間が他界しており、紛争中の卒業でもあったため連絡先が分かる人が半数ほどしか無い中では、まあ最大限の参加者だったと思います。

まるで40年前にタイムスリップしたよな、和気藹々と楽しい雰囲気の中で終了しました。

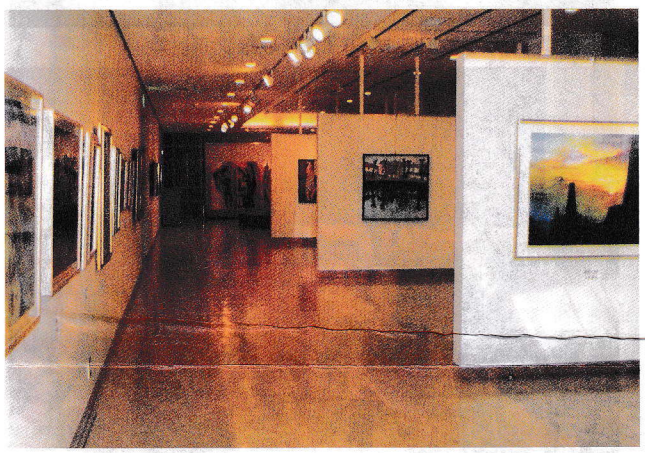
(川島 明彦・記)

第28回八雲展

会期：平成22年5月21日～26日
会場：大崎「O美術館」
出展者：府立高等学校11名、東京都立大学8名、都立大学附属高等学校23名、計42名

府立高等学校創立50周年を記念し、府立高等学校、東京都立大学、都立大学附属高等学校の三校を結ぶ美術愛好家の展覧会「第28回八雲展」は、油彩、水彩、日本画、水墨、彫刻、銅版画、イラストレーション、ちぎり絵から映像など42名93点の多彩な出展で、いつもながらの見ごたえのある展覧会になりました。

「八雲展」は、将来は桜修館の卒業生にも呼びかけ、4校にまたがる展覧会にする構想もあるようです。



機械技術研究会(機研)OB・OGの懇親会2010

日時：平成22年10月16日(土)
12時30分より
会場：市谷「ブオーノ」
参加者：19名

毎年「鉄道記念日」直近の土曜日に開催する、機械技術研究会(略称機研)のOB・OGの懇親会を今年も表記のとおり開催。遠くは奈良や長野から参加した会員に、紅一点、関 弥生さん(5期)を交えた1期から22期の19名が近況や研究成果を語り、工夫を凝らした鉄道の展示・運転や資料の公開・配布など、例年に増して熱のこもった懇親会となりました。

●来年は10月15日(土)、同時刻に同じ会場で開催。

(野口貞義・記)

東京都立大学附属高等学校「校歌・學生歌・寮歌・記念祭歌集」

皆さんの投票による上位10曲＋「乾杯の歌」を収録した

DVD頒布開始!!

このＤＶＤは同窓会有志が企画し、理事会に提案して承認を得、母校閉校記念の協賛事業として、母校資料室への永久保存と会員への頒布を目的に、学校、府立高等學校同窓会等の協力と、会員のボランティアにより、独立採算制で制作したものです。

選曲は本紙の前号に、平成17年版名簿に掲載されている校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌30曲に沼津寮歌を加え、「歌える歌・歌いたい歌」を募集し、その上位10曲と「乾杯の歌」を、本年５月22日、100名の会員により、母校の体育館メインアリーナで収録したものです。

収録に際し、歌詞・楽譜は引用文献に記載されている作詞・作曲者の記述に従いましたが、現状に即し一部変更した箇所があります。歌詞は、府立高等学校時代は歴史的仮名遣い旧漢字、新制からは現代仮名遣い常用漢字としましたが、一部混在している部分は引用文献によりました。

収録は「乾杯の歌」以外は発表順とし、全曲、映像に歌詞がオーバーラップしていますので、カラオケとしても使用することが出来ます。

同窓会員１００名参加により１１曲を収録

都大附と桜修館吹奏楽部により３曲を収録

DVDの内容

全編再生33分

1	吹奏楽	①	校歌（嗚呼西山の）	2:08
2	〃	②	學生歌（青春といふ）	1:52
3	〃	③	文乙歌（いざ友）	1:53
	東京都立大学附属高等学校 吹奏楽部			
	都立桜修館中等教育学校 吹奏楽部			
	指 揮：大関　英			
4	斉　唱	①	校歌（嗚呼西山の）	2:15
5	〃	②	學生歌（嗚呼烈誠の）	1:48
6	〃	③	學生歌（青春といふ）	1:37
7	〃	④	文乙歌（いざ友）	1:35
8	〃	⑤	第五寮歌（紫の霞）	2:48
9	〃	⑥	第八寮歌（春残更に）	3:16
10	〃	⑦	新制第一回記念祭歌（手をつなげ）	2:21
11	〃	⑧	新制第二回記念祭歌（古きいらか）	3:04
12	〃	⑨	新制第七回記念祭歌（吹きすさぶ）	2:08
13	〃	⑩	新制第十七回記念祭歌（晩夏に集う）	2:17
14	〃	⑪	乾杯の歌（Stein Song）	1:43
	東京都立大学附属高等学校同窓会有志			
	指 揮：佐藤文行　ピアノ伴奏：桐山百合子			
15	エンディング			2:09

頒布価格（送料とも）1,500円

＊全歌詞を掲載した小冊子付き

注文の方法：同封の振替用紙でご注文ください。
１週間程でお手元にお送りします。

同窓会への連絡は

住所の変更などの同窓会への連絡は、〝郵便〟で左記までお送りください。

〒152-0023
目黒区八雲1-1-2
東京都立大学
附属高等学校内
平成23年4月1日からは
東京都立桜修館
中等教育学校内
東京都立大学附属高等
学校同窓会 宛

編集委員

内野滋雄（1期）
野口貞義（4期）
徳井　巖（10期）
瀧野日出雄（30期）
新美勝太（58期）
山田健一朗（58期）
加藤恒子（60期）
齋藤春香（60期）
中村舞弓（60期）
伊久見茉優（60期）